



『本願寺 帯広別院』

全国の別院シリーズ その1

浄土真宗布教の第一歩、明治28年から9年の後、雨露を凌ぐ陋屋は、寒暖の差も厳しく、自然との斗いに、ともすれば荒び勝ちな人の心に、尾雪の老僧は、今日も明日も、彌陀の佛恩を、本願力の尊さを、倦むことなく説いて居た。

明治39年、大谷光瑞門主御巡教の砌り、300余名の信徒は、初代藤本長藏を總代として別院昇格を申請して居る。鏤骨の功を嘉されてか、40年10月、本派本願寺帶広別院として御認可され、新しい出發の時を迎える。

年を閲して昭和5年。歴代輪番と檀家の悲願の結晶であった本堂が完成した。御垂示を戴いたのは大正15年、諸般の事情から、帯広市民は素より、遠く道北・道東の配下寺院の信徒も馳せ参じて、喜びを共にした落慶法要の日は昭和10年9月のことである。

昭和32年別院創立50周年法要。昭和38年親鸞聖人700回忌法要を、何れも勝如上人をお迎えして修行されて居るが、その記念事業として、淨華堂・対面所・庫裡の落成を見た。

昭和59年、恰も宗祖聖人御誕生800年・立教開宗750年慶讃法要を厳修するに当たり、即如上人の御親修を仰いだ記念事業は、近代設備に意を注いだ、明るい別院の顔として、光照・光真御門主の一字を戴き「照真閣」と命名された。

他に別院の育成した、帯広幼稚園。鉄南・藤花・さくら保育園。ボイスクアウトがあり、地域社会に密着して、その教化活動は顕著な実績を挙げて居る。

草創より現在まで、別院史の根幹を概観する時、何時の世にも、不退転の本願力に帰依する、念佛者の心が息吐いて居ることを知る。



安芸門徒のシンボル共命鳥

「すべての人の心の尊さや存在を大切にしあう社会」のシンボルが共命鳥です。戦争をなくし、平和を願う安芸門徒のシンボルです。

その広島別院のシンボルとして掲げているのが、
共命鳥（グミヨウチヨウ）です。シンボルマーク、見ら
れたことがありますか？

名称は聞いたことがあるけど行つた事が無い…、と言ふ方が多いのですが、なぜですか？

安芸教区の各種行事等の会場としての役割を担い、ご法座も毎月開催されています。一緒に、広島別院本堂へお参りし、讃仰偈をお勤めし、ご法話も聴聞しました。



妙好人 淺原才市さんを訪ねる参拝旅行(平成26年4月7日)

住職レター

春のお彼岸を迎えて、気持ちの良い気候になつてきました。昔から、暑さ寒さも彼岸まで…と、よく言つたものです。